

## 心身障害学研究科

学生 の 確保 (人)	年 次	定 員	志 願 者		受 験 者		合 格 者	入 学 者	
			学 内	学 外	学 内	学 外		学 内	学 外
1 年 次	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	( - )	( - )	( - )	( - )	( - )	( - )	( - )	( - )	( - )
3 年 次 編 入 学	-	-	-	3	-	3	-	-	-
	( - )	( - )	( - )	( 3 )	( - )	( 3 )	( - )	( - )	( - )
学 位 授 与 数 (人)	博 士 課 程 修 了				論 文 博 士		博 士 課 程 修 士		
	修 了 年 次 定 員		修 了 者 数		授 与 数		授 与 数		
	8 ( 8 )		6 ( 4 )		- ( 4 )		4 ( 5 )		
学 生 の 研 究 活 動 (件)	論 文 ・ 著 書 発 表 数			学 会 発 表 数			受 賞 ・ 表 彰 等		
	21 ( 47 )			36 ( 71 )			- ( - )		
学 生 の 進 路 (人)		教 員	企 業	公 務 員	研 究 員 (学 術 振 興 会)	そ の 他			
	修 了 者	4 ( 3 )	- ( - )	- ( - )	- ( - )	2 ( 1 )			
	退 学 者	2 ( 3 )	- ( - )	- ( - )	- ( - )	2 ( 2 )			

・「学位授与数」の欄の「博士課程修士」は、中間評価の合格者数を示す。

・( ) は前年度の数値を、 は外国人留学生を内数で示す。

### 1 心身障害学研究科の活動

一昨年より、中間評価論文ならびに最終論文に関する論文発表会を年6回開催し、学生の課程修了を促進するために、発表の機会を多くすることとした。5年前から本研究科では各学生に主任指導教官の他に2名の副指導教官からなる論文指導小委員会を設け、学生の論文指導にあたってきた。中間評価論文については論文発表3週間前、最終論文については、4週間前にそれぞれ論文の提出を求め、発表の可否を論文指導委員会で評価するとともに論文指導を行うというステップで論文指導の強化を図ってきている。

### 2 教員の教育業績評価の状況

課程博士修了者数は6名であり、昨年より2名多い修了者数であり、定員の75%の課程博士授与率であった。また昨年と同様、学生の論文発表、および学会発表を積極的に指導するとともに、国際学会での発表および英文誌への投稿なども含め、海外への情報の発信を指導し、昨年よりも論文数、学会発表数は少ないが、質的に向上してきていると判断する。このことは教員による指導の成果といえる。

教員の教育業績については、対応する心身障害学系と協力して、学系および研究科運営委員会で自己点検、自己評価を行ってきているが、その教育業績評価の結果は指導学生数を考慮した予算配分数などの形で活かされている。また、学位授与率などに応じた制度を、現在の教員の集団的な指導責任体制である指導小委員会制度といかに併用するかが課題である。

### 3 自己評価と課題

課程修了者6名、日本学術振興会特別研究員4名と着実に成果をあげてきていると評価できる。また、本学研究技官3名、私立大学教官1名、専門機関1名の就職者を出し、本研究科の目指す人材養成を着実に実現している。

課題に関しては以下の3点があげられる。

- (1) 在学6年以上の学生が9名おり、そのうち次年度提出予定者は4名である。これらの学生の課程修了促進を指導するため、さらなる指導が望まれる。在学6年以上の学生の論文作成意欲は十分有り、5年で修了できる指導体制の確立が必要といえよう。
- (2) 高次脳機能障害に関する研究領域の充実に、人間総合科学の他専攻と研究・教育における連携を図る必要性がある。
- (3) 入学試験の応募者数は例年と変わらないが、近年他大学からの受験者が増加しているといえ、さらにインターネット等での研究科の情報を広める必要性がある。